第１０号　２０１１年１０月　発行

鎌倉・九条の会ニュース

鎌倉・九条の会
TEL:0467-24-6596
FAX:0467-60-5410
0467-24-6577

Email:iza@kamakura9-jo.jp
HP:http://kamakura9-jo.net

東日本大震災後、核のない平和な世界を考える

講師　秋葉　忠利さん

鎌倉・九条の会では、前広島市長・秋葉忠利さんの講演会を九月十九日（月・祝日）、鎌倉生涯学習センター・ホールで開催しました。

市長在任中、平和市長会議の先頭に立って、同会を世界の五〇〇〇におよぶ都市に広げることに貢献した秋葉さんは、被爆者の声を胸に、核兵器廃絶を強く訴えました。核兵器廃絶にも、原発に依存しない社会を目指すうえでも、都市・地域住民の力が大切と語る秋葉さんの講演は聴衆を励ましました。

講演の始めに、秋葉さんの「東日本大震災で亡くなられた多くの方のご冥福をお祈りします、また、被災された皆さんにお見舞いを申し上げます」との言葉がありました。

湘南から平和のメッセージを

湘南地方の都市が平和について大変、積極的な活動をしているのはとても素晴らしいことです。

鎌倉市では、一九五八年に平和都市宣言がおこなわれています。これは市民の請願を市議会が全会一致で採択したという、市民主体の運動になっていたところが素晴らしいと思います。そして、湘南から平和のメッセージを日本全国に発していくことは、とても重要なことと思います。

東日本大震災をどう受け止めたか？

東日本災害後、広島では、どういうふうにこれを受けとったかといいますと、やはり被爆者の皆様、あのときと同じだ、とても人ごとは思えない、何かをしなくてはいけないんだということで、ボランティアの皆さんなどが被災地に飛びました。そのときに、被爆者の脳裏に浮かんだ映像は、当然、原爆による当時の災害の様子でした。

数少ない被爆写真のなかに、熱線によって影が焼付けられたようすがあります。さらに、被爆後に高熱の火災が起きたことは、よく知られていることです。廃墟となり、まさに「死の町」になりました。

また、東京大空襲の結果を思い浮かべた方、さまざまな方がおられることでしょう。

私がこれから説明したいのは、“死の町”とか、人の住めない町が、再び現実にならないように、そして、被爆者の願いを実現するために、広島を中心にしてこれまでの六六年間をケーススタディとして見ておこう、広島の経験に学ぼう、ということです。

平和の原点、他人の痛みが分かる

人の痛みのわかる心、それが、平和の原点です。そのことを伝えるために、できるなら忘れてしまいたい自分の被爆体験を、語ることはその当時のことを思い出すことですから避けたい気持ちはあるけれども、被爆者たちは一生懸命話をしてきました。

被爆体験そのものがいかに残酷なものであったか、人間のあり方までを問うものであったかということです。その被爆体験を話すことによって、被爆者たちは、三度目の核兵器の使用を阻止しました。

ジョン・ハーシーというアメリカの作家が、一九四六年に広島にやってきました。六人の被爆者の体験を克明に、説得力ある被爆体験記を書いて、それを八月三十一日号のニューヨーカーというアメリカでもっとも知的で、良質な雑誌に一挙に載せました。一日で三〇万部が売り切れた記録があります。

そのハーシーさんが二度目の、一九八五年に広島にきたとき、「三度目の核兵器の使用を阻止したのは、被爆者が勇気を持って、世界に自分たちの体験を訴えたからだ」といっています。

被爆者のおこなったことは、復讐や敵対という世界観を捨てて、和解の哲学をつくって、それを実践したということです。

被爆者は、あの世を見てしまった人たちですから、あの世から現世に戻って、核戦争から人類を救う、その努力を一生懸命しています。それが還相回向（げんそうえこう、浄土真宗の教えで、一度浄土にいった魂が、あるいは人びとが、浄土からこの世に再び戻って、すべての人びとが救われるようにさらなる努力をするという）の現代的な姿なのであろうと考えることができます。

被爆者の言葉は、簡単にいうと、「こんな思いを他のだれにもさせてはならない」ということになります。

仮に敵と呼ばれるような人たちであっても、その人たちに自分たちが経験したような痛みを二度と味わせてはいけないというところがとても大事です。

広島で起きたこと「生きることが辛かった」

一九四五年の八月六日以降、被爆者が生きていくうえで、まず、生活そのものが非常に大変でした。広島の場合は、原爆で本当に町そのものがなくなってしまったわけです。

当時は放射能ということも、原子爆弾というものも、専門家、それから普通の市民にはほとんどわかりませんでした。放射線傷害による病気そのものが理解できなかった、進駐軍はプレスコードを敷いて情報を規制していました。

自分たちも被爆しながら、一生懸命努力をした広島の医師や医療関係者がたくさんいます。医療関係者の三分の二以上はすでに亡くなったなかで、地に足の着いた生活レベルでの医療が英雄的に提供されていたという状況です。

被爆者同士がようやっとわかりあう、被爆者の連帯ができましたが、自分たちがどういう被害にあったかということを、被爆者以外に伝えようとしてもなかなか伝わりませんでした。

その被爆体験を何とか、お互い同士理解しようとする努力というところで、最終的に、もうこんな思いは自分たちだけでたくさんだよ、子どもたちには何があってもこんな経験をさせてはならない。そういったところでは一致することができました。

この考え方がイデオロギーを超えて世界中にさまざまな形で発信できるようになってきています。都市が被害を受けて、都市としてその悲劇に対応してきたのだ、というふうにまとめることができます。

「想定外」の本当の意味

「想定外」＝Unthinkable「考えることのできない」あるいは「コントロールができない」ということになります。

「想定外」というのは、自分たちが思考停止をしてしまった場合に、それについては責任はないんですよ。「想定外」だからという形で、免罪符として使われてきた言葉でもあります。

核抑止論とか、核の平和利用ということも、実は、本当であれば「想定外」だったものを、何とか「想定内」にコントロールできる範囲のものなのだよ、に持ってくるための、一つのトリックだったのです。

スリーマイル島もそうですし、チェ

ルノブイリも、福島も、すべてに共通しているのは、いわゆる「想定外」ということはありえないということです。

核兵器は廃絶するしかない

福島がいわゆる「想定外」ということはありえないのと同じように、実は「核抑止論」も、成り立ちえないのです。

「核抑止論」の前提になっているのは、核兵器を使わないということなのです。核兵器を使うということは、「想定外」になっている。ところが「想定外」がもはや存在しないということになれば、使うということは「想定外」だとはいえなくなってしまっている。「想定外」「想定内」というところの議論をきちんとすると、核抑止論は成り立ちません。

世界のリーダーたちのあいだでも、オバマ大統領も、潘基文国連事務総長も、核兵器のない世界を目指そうといっています。核政策を指導してきたキッシンジャー、ナン、シュルツ、ペリーなどという人も「唯一、可能性があるのは、核兵器を廃絶することだ」といっています。

想定外がどのようにして想定内になったのかということを一緒に振り返ってみることにいたします。

被爆者が何十年も経ってから、精神的に悩むということがあります。

被爆者の現在の状況として、いまだに広島ということで差別を受ける場合もあります。その原因になった六六年前を簡単に振り返ってみましょう。

飛行機の名前はエノラゲイ。

地上六〇〇ｍで爆発。

熱線・爆風・放射線のエネルギーがそれぞれ三五％、五〇％、一五％の割合で都市を襲った。

六〇〇ｍが意味するのは、直接当たる爆風と地上で反射する爆風が打ち消しあわず最大の被害をおよぼすように意図された高さでした。一平方メートル当たり一九トンの圧力、風速が二八〇メートル／秒。

まず生きることが大変でした。

一九四九年、広島平和祈念都市建設法・原爆二法。

胎内被曝について、正確な情報をきちんと伝えることはどんな場合にあってもとても重要だと思います。

一九六三年の部分的核実験禁止条約（空気中での核実験の禁止条約）。

一九七〇年のＮＰＴ核不拡散条約。

一九八六年のレイキャビック会談。

一九八二年に始まる平和市長会議。

平和都市は九月十五日現在で、世界の一五一カ国、四九九八都市（あと二都市で五〇〇〇に）、二〇〇四年から急激に加盟都市数が増えてきています。

より多くの都市が平和市長会議に加わる

二〇二〇年ビジョン計画＝二〇二〇年までにすべての核兵器を廃絶しようと世界中の都市に呼びかけました。そして、全米市長会議（約一二〇〇都市が加盟）が賛成決議を毎年おこなってくれています。ことしの六月の決議では加盟都市五〇〇〇を目指す運動を展開しようと決議されました（潘基文事務総長も全米の動きを称賛）。

都市は武力を持たないわけですから、武力を持たない都市同士の関係がそのまま世界の国同士の関係になるような未来モデルを提示してもいいだろう。そう私たちは思っています。

しかし、九・一一同時多発テロからは、核兵器さえも使っていいという声があり（それはおかしいという声が余り大きくはなかったので）、被爆者にとっては、とんでもない時代がきてしまったと、そういう危機感を感じ、やむにやまれぬ気持ちになって、対抗する市民の動きをつくろうとしました。

悲劇の記憶を持ち続ける都市

歴史的に都市は悲劇の記憶を持ち続けている場でもあります。

第一次大戦で化学兵器が使われて最初の被害をこうむったベルギーのイーペル市はその記憶を現在まで具体的な形で継続させ生かしています。ゲルニカ、アウシュビッツ、広島にしても…。

悲劇を共有し記憶するということでは恐らく人間にとって、都市というのが、自然な単位だと思います。広島、長崎のメッセージも実は、世界的に普遍性を持っていたということなのです。そして、イーペル市が平和市長会議の国際事務局を引きうけてくれています。

都市というものは、実はある意味で文明の発祥の地でもありますし、経済の活力の源です。多様性があるからこそ都市は元気なのです。違った考え方の人たち、その人たちがお互いに寛容であるなかから活力が生まれてくるというところが、都市の力です。

都市の役割は極めて重大、有用

法制度上、それから制度上、機能的に都市というのは、市民の声を直接代弁する、そして世界にもそれを発していくような役割を与えられています。

一つだけ例を挙げますと、皆さん、国が国民保護計画というのをつくって自治体が条例を制定しなければならなかったことを憶えていると思います。そのなかに核戦争に対する対応というのが入っていました。ところが、国のほうは核被害の想定を何も示せなかったので、広島市は、核戦争が一度起こったら、どんなことをやっても市民を保護することはできない、核兵器を廃絶することだけが唯一、市民を保護できる可能性だという結論を出しました。

都市が独自に自分たちの主張をすることはかなりの程度できます。特に市民の生命や財産にかかわることであれば、それはやはり都市が責任を持たなくてはいけないことだと思います。

これは、世界五〇〇〇もの都市が、同じように考えていることです。そして二〇二〇年までの核兵器廃絶を目指しています。被害者の方がたにとっては、ずいぶん先のことに思えるでしょうが、現実的に考えて二〇二〇年、一人でも多くの被爆者とともに核兵器のない世界を迎えたいのです。そのことはまた、子どもたちに対する私たちの義務でもあります。

世界は動き始めている

いま、国家の枠組みをこえて、多数派市民が立ち上がり、世界は動き始めています。国連加盟国一九二ヵ国のうち、核拡散防止条約（ＮＰＴ）の批准国が一九〇ヵ国。非核地帯条約の対象国が一一九ヵ国・地域です。非核地帯条約ってみなさんご存じですか。これには非核三原則が入っているんです。しかも、核兵器を持っている国が自分たちの国を攻撃してはならないという条項まで入っています。唯一の被爆国日本は、非核三原則を政策としていますが、法律になっていません。

国境を越えて、都市と都市、市民と市民、ＮＧＯ同士が連携していく新しい時代です。平和市長会議はそのよい例です。そして、それぞれが、いい本を読み、ツイッターとかメールとか、いろいろなかたちで話題をつくりあげていくことが大事になってきています。市民の活動は新しいアイデアが盛り込まれていくようです。核兵器廃絶を目指す、〇〇市行動計画というようなものを市民が行政を巻き込んでつくり、それを議会に議決してもらう、あるいは市の要綱としてつくってもらうこともできます。

広島の商業高校ではピースデパートというのを開いて、平和について一緒に勉強しています。子どもたちが被爆者から話を聞いて、子どもピースサミットを開いています。国際的なイベントに子どもたちに入ってもらうことも大事です。

核兵器廃絶へ確信を持って

国境を越えた市民の活動を受け止める国連など国際機関のシステムを直していくことも必要でしょう。たとえば核拡散防止条約の事務局を国連の中につくるとか、今の国連総会を上院に格上げして、各国の都市で構成される下院をつくるというようなことです。

結論として私たちは、核兵器の廃絶はまったく可能だと頭に叩き込んで活動していくほうがいいと思います。これまでの歩みは遅いですけれども一歩一歩道は開かれています。

核兵器を
なくそう！！

一九六三年に部分的核実験禁止条約があって、七年後、核不拡散条約がありました。七二年に化学兵器禁止条約、八二年に、ニューヨークでの一〇〇万人集会があって、九三年、生物兵器禁止条約、九八年、対人地雷禁止条約、二〇〇八年に、クラスター弾禁止条約といった具合です。私たちが努力していけば、二〇一五年には核兵器禁止条約ができ、二〇二〇年の核兵器廃絶も可能でしょう。

環境・エネルギー問題にも市民の力を

環境とエネルギーの問題についてお話いたします。最近、大きな台風がたくさんきているようですが、発生個数は増えていないのに、一つ一つの強度があがっているのです。また局地的な豪雨という現象があります。結局、地球温暖化の影響だといわれます。アメリカは地球温暖化に対して、ブッシュ政権はそれほど関心を示しませんでした。各都市が都市ごとに温室効果ガス削減目標をつくって政府の参加しなかった京都議定書に添うよう取り組みました。

広島でも、広島カーボンマイナスセブンといって、温室効果ガスを二〇五〇年までに七〇%までに削減する計画をつくりました。節電効果のある電気製品を使ったり再生エネルギーを効率的に供給するよう努力しています。ごみの問題にしても、市民一日一人当たりのごみの排出量が広島市はダントツに少ないです。一九七六年に全国に先駆けて、ごみの五種類分別を始めた成果です。

災害からの復旧・復興について少し触れましょう。

「原爆市長」といわれた浜井信三さんは、公選で初めて広島市長になった人ですが、彼は原爆が落とされたとき、市の配給課長をしていました。そのために市民の生活実態をよく知っていて、市民の切実な要望をいつも念頭に、自分が中心になって復旧復興の計画をつくり、国へも法律をつくるように働きかけました。東日本大震災でも、市町村の首長さんが、市民住民の生活本意の復旧復興の道すじをつくることが大事です。

広島の場合、被爆者の医療について未知のことが多く、プレスコードの問題もあって大変でしたが、実地に治療しながら、医師、医療関係者たちは懸命に被爆者の健康を支えました。被爆者援護について国を動かしました。こうした広島の経験を生かすかたちで、核兵器のない世界を目指す平和市長会議は広げられていったのです。

変革の力は市民一人ひとりの中に

このように市民の力が「変革」のために発揮されるには、四つのことを頭に入れておく必要があると哲学者のコーネル・ウエストはいいます。

一、変革のための力は私たち市民一人ひとりの中にあり、歴史的な文脈のなかの私たちのものである。
二、一人ひとりの生命・生活が大切。
三、変革の目的は子どもたちのため。
四、古い因習に囚われないリーダー。

しかも彼は、私たちのなかにある「最善のもの」（Better Angels of Our Nature リンカーンの言葉）を引き出すことができる。

日本の電気料金を高くしている原因の、電力の大量生産大量消費に基づく社会のあり方を変えるのも市民の力です。また再生可能エネルギー分野を伸ばすために、発電と送電を別系統にしようという施策も、市民の力がどのように発揮されるかが鍵です。

核兵器廃絶へ向けて行動するというとき、先ほど、都市の多様性ということを申しましたが、まず多様な人たちと話をし始めることが大事です。職場の人相手だったら共通点があって話しやすいが、隣の人は難しいとよくいわれます。しかし、どこか接点を見出して隣の人と話し始めるのです。

パッチワークキルトをつくるように

『元気な都市の特徴』についてR・フロリダさんがいっています。都市には多様な人びとが住んでいるから、お互いに寛容で、うまく折り合って生活していること。その寛容性を示す指標で一番信頼できるのは、「ゲイ・レスビアン指標」で、芸術家の割合を示す「ボヘミアン指標」や「人種指標」も相関関係が高いということです。

元気な都市は寛容であるという説明は、パッチワークキルトで説明できます。パッチワークは、まず四角に切った、さまざまに違った布を集めます。そして布切れの直線の一辺一辺のところを互いに縫い合わせ模様にしていきます。結果として、美しく温かいキルトができます。一枚一枚の布切れを違いのある人間と思っ

てください。直線の一辺のところだけ共通点があるとして縫い合わせます。隣人同士、仲良くなってください。皆がみな、すべての点で共通点を持っていなくていいんです。一つの共通点で結び合って、美しく、温かく、強いパッチワークキルト＝社会の姿が現われます。

こうした説明の基は、一九八八年、アメリカ大統領選の民主党候補として頑張っていたJ・ジャクソンの演説にあります。貧しく、母のいない彼は、祖母に優しく育てられ、祖母のつくった温かいパッチワークキルトが忘れられず、例にひいて、多様な人間が一つの共通点で結び合い、一枚の大きな温かいパッチワークキルトのようなアメリカをつくりたいと語ったのです。

日本の理想も、世界の理想も、人びとの多様性を基に、一つでいいから共通点を大事にして連携し、きれいで温かいパッチワークをつくっていくことにあると思います。

会場からの質問・意見に思うこと

休憩時間中に、たくさんの方がたからご質問をいただきました。福島の原発事故に関するものが多いです。ご質問の趣旨をまとめてお受けして、少しお話していきます。

日本の原子力平和利用＝原発開発の経緯をみますと、時の政府の政策として、アメリカの政策に沿って政・官一体で一九五〇年代半ばから、急ピッチに大がかりに推し進められました。将来のエネルギー政策を見通してという名目でしたが、一部政治家の日本も核兵器保有の潜在力を持つべきという思惑も秘められていました。しかし、平和利用ということでつくられた原子力委員会に、当初、湯川秀樹先生も入っていました。湯川先生の意思ではなかったと思いますが…。大学の物理学科でも理論面でというより、実践的な仕事をしたいという学生が多く、原子力工学は花形分野でした。こうした大きな流れのなかで、何回かの事故があり、原発安全宣伝に警鐘を鳴らす科学者もいましたが、その人たちはマスコミでの発言はほとんど与えられず、また学会や大学で冷遇されました。

核兵器を二〇二〇年までになくすという目標は、アメリカのオバマ大統領のプラハ演説や、アメリカ政治の中核にいた人びとの核抑止力論からの転換もあり、現実性が出てきたと思います。しかし、ここまできたのは一朝一夕のことではありません。東西冷戦下、日本の原水禁運動も分裂した苦い思い出があります。

反原発・脱原発の運動、そして核兵器廃絶へ向けての運動を進める場合、いずれも運動の歴史を整理し、その理解を深めていくことは重要だと思いますが、いま、いろいろな立場の違いはあっても、共通点を見出して連帯していくことが大事です。

反原発をいう場合、エネルギー、農業、経済などの政策から、人びとの生活までをどう再構築していくか考える必要があります。そして、自分たちの声が政治に反映されていく具体的なシステムをつくっていくことが大事です。都市ごとの、地域ごとの連帯が鍵です。

福島原発事故の実状について、放射性物質の拡散状況を含めて、日本のマスコミ報道と海外からの情報とのあいだに差があります。それを埋めるために、専門家が市民の中に入ることによって、きちんとした情報をみなで共有できるようにしたいと思います。また、エネルギー問題にしても、専門家プラス市民委員会のようなものをつくって、自分たちの都市・地域からエネルギー政策の一端を発信していくことも大切です。

原発を考えるとき大きな問題は、世界中の原発を止めたとしても、放射性廃棄物をどうするかということです。物によっては放射性物質が何万年、何十万年と出され続けます。後世、人類がその害をこうむらないよう、世界の知恵を集めて対応策が考えられるべきです。

核兵器の場合は、先ほど申し上げたように、核拡散防止条約というものがあって、核保有国の核軍縮努力、これ以上保有国を増やさない、原子力平和利用の権利担保のことが三本柱となっていて平和利用については規制がありません。原発を持つことは、核抑止力を潜在的に維持することだと主張する勢力が存在するとき、平和利用について厳しい規制を盛り込むことが必要ですが、容易でなく、また別の条約をつくるにしても時間のかかることです。被爆者の願いをかなえるために、なんとしても、核兵器禁止を条約化すべきなのか、それとも平和利用への規制にも踏み込んで核廃絶を目指すべきなのか、いろいろ提案も出てくると思います。

私は昨年の八・六広島宣言で、「世界で一番我慢強い人びとである被爆者」という表現をいたしましたけれども、その被爆者の切実な願いをかなえるために、福島の事態を心

配している人びとのなかから、もっとたくさんの人びとが、いろいろな考えがあるにせよ、核兵器廃絶の行動に起ち上がってほしいと思っております。

＊講演の要約・文章化の責任は鎌倉・九条の会にあります。

参加者の感想

アンケートのご協力ありがとうございます。いくつかをご紹介します。

◆TVやインターネットなどのニュースでは知ることのできない興味深い話を伺うことができ、大変勉強になりました。全体を通じて、希望が持てる内容であり、大変勉強になりました。少しずつ自分にできることを、またしていこうと思います。どうもありがとうございました。（30代・女性）

◆国家ではなく都市からの変革というシフトチェンジに賛成します。エネルギーも、食も地産地消という話しをよくします。他の都市、地域とも共存するあり方をもっと考えて生きたい。（60代・女性）

◆当事者意識を持って市や周囲を動かしていく、という大切さをあらためて認識しました。

◆目からうろこの情報（作戦）がいっぱい。発想力、思考力のある魅力的な元市長さんですね。広島市、いいなあ（鎌倉もボヘミアン指数では負けないかも）。盛りだくさんな内容をわかりやすく、熱く語っていただき、元気が出ました。自分にできること、もっと考えなくては。どうもありがとうございました。（50代・女性）

◆とても理論的で整理されたお話しをありがとうございました。小さな行動でも、その意味を深く考えることができます。私もAFS（10期）のメンバーです。平和について考えるきっかけをもらいましたね。今でもメールやリユニオンでつながっています。今後のさらなるご活躍を期待しています。（60代・女性）

◆国という単位でなく都市という単位というお話はとってもわかりやすいです。まず目を小さくして考え、行動することからはじめたいと思います。（50代・女性）

◆市民の持つ力の可能性をあらためて考えさせられた。広島市長時代の秋葉氏はとても厳しい方のようにみていたが、気さくな語り口で楽しく聴けた。すばらしい講師だった。（40代・男性）

◆私は、パッチワークキルトで憲法9条をつくっています。日・英・中・韓・仏・スペイン語・ロシア語で作りました。最後にパッチワークのお話しで、とても力強くうれしかったです。昨年、NY、NPT会議のパレードで秋葉市長が英語でメモなしで話しをしているのを直接見ました。なるほど留学していらしたのですね。2002年に作られた「東京原発」という映画が今！とても面白いです。TSUTAYAにもあると思います。ぜひ皆さんで見てください。（60代・女性）

◆チェルノブイリの事故の後、学習会、集会などに行ってみたのですが、「自分たちだけが正しい」と信じて疑わない人びとの空気におじけづいてしまいました。以降、地味に一人でできることを続けています。あのころとは違って、緩やかな連帯も認められる。最近の方が意見表示しやすいようにも感じています。毎年、夏のニュースでお聞きする秋葉市長の宣言に、いつもわが身を振り返る機会をいただきました。ありがとうございます。これからもどうぞお元気で、ご活躍くださいませ。（40代・女性）

お　知　ら　せ

☆鎌倉憲法学校

11月26日（土）　11時～16時　鎌倉商工会議所・地下ホール　５００円

日本国憲法の力と可能性

講師；渡辺　治氏（政治学者、一橋大学名誉教授）

［第1講］１１：００～１２：３０

◆憲法は平和、私たちの暮らしをどう変えたか～憲法９条、２５条の戦後史

［第２講］１３：３０～１６：００（質疑応答、まとめ含む）

◆３．１１後の日本社会・政治の行方と憲法の可能性

☆毎月の９の日行動

鎌倉・九条の会は毎月９日に鎌倉駅東口でリーフを配っています。

短時間でもご一緒に！！

毎月９日　平日　　１５時～

土・日・祝日　　１１時～

小町通・鳥居前、九条の会・旗の前に集合

☆予告 講演会

２０１２年3月9日（夜）

講師；　田中　優氏

（反原発の立場で活動を続ける文筆家）

鎌倉生涯学習センター・ホール

☆４月９日「鎌倉・九条の会」の講演会が本になりました。

『取り返しのつかないものを、取り返すために』

――大震災と井上ひさし――

大江健三郎、内橋克人、なだいなだ、小森陽一

岩波書店・５００円

☆九条の会全国交流集会

１１月１９日（土）

１０：３０～１６：３０

日本教育会館（東京・神保町）

＊詳しくは九条の会ホームページをご覧ください。

ホームページがリニューアルしました。

一度ご覧ください。

ＨＰ；http//kamakura9-jo.net